彦根市埋蔵文化財調査報告書第93集

福満遺跡
第27・28・29次発掘調査報告書

―市道小泉城南小学校線道路改良工事に伴う発掘調査―

令和６年３月

彦根市

彦根市埋蔵文化財調査報告書第93集

福満遺跡
第27・28・29次発掘調査報告書

―市道小泉城南小学校線道路改良工事に伴う発掘調査―

令和６年３月

彦根市

第28次：竪穴建物(SH14)完掘状況〔北西から〕

第28次：竪穴建物(SH14)完掘状況〔真上から〕

第28次：溝(SD15)完掘状況〔南東から〕

第28次：掘立柱建物(右：SB1、左：SB2)完掘状況〔北から〕

例　　言

1．本書は彦根市小泉町に所在する福満遺跡の第27・28・29次発掘調査報告書である。
2．調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等については以下のとおりである。

第27次現地調査	所在地：彦根市小泉町　地先
	調査原因：市道小泉城南小学校線道路改良工事
	期間：平成31年4月15日～令和元年6月25日
第28次現地調査	所在地：彦根市小泉町　地先
	調査原因：市道小泉城南小学校線道路改良工事
	期間：令和元年7月3日～令和元年10月31日
第29次現地調査	所在地：彦根市小泉町　地先
	調査原因：市道小泉城南小学校線道路改良工事
	期間：令和2年4月8日～令和2年6月30日
第27・28・29次整理調査	期間：令和5年4月27日～令和6年3月31日

3．本調査は、彦根市文化財課（平成31年4月1日～：彦根市市長直轄組織文化財課、令和2年4月1日～：彦根市歴史まちづくり部文化財課、令和5年4月1日～：彦根市観光文化戦略部文化財課）が実施した。各年度の調査の体制は下記のとおりである。

【令和元年度】（第27・28次現地調査）

市長：大久保　貴	
参事：山本茂春	副参事：広瀬清隆
文化財課長：松宮智之	主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫
課長補佐兼管理係長：牧田　歩	主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘
文化財係長：三尾次郎	主査：深谷　覚
主査：林　昭男	主査：戸塚洋輔
主査：田中良輔	主査：多賀公一
主任：斎藤一真	主事：西坊仁志
技師：船山友祐	技師：内藤　京
臨時職員：沖田陽一	臨時職員：樋口杏奈

【令和2年度】（第29次現地調査）

市長：大久保　貴	
歴史まちづくり部長：広瀬清隆	歴史まちづくり部次長：久保達彦
副参事兼文化財課長：松宮智之	主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫
主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘	主幹：辰巳　清
副主幹：小川有紀	課長補佐兼管理係長：牧田　歩
文化財係長：三尾次郎	主査：多賀公一
主査：林　昭男	主査：戸塚洋輔
主査：田中良輔	副主査：門西靖子
主任：斎藤一真	主事：西坊仁志
主事：北村双葉	主事：船山友祐
技師：内藤　京	
会計年度任用職員：沖田陽一	会計年度任用職員：樋口杏奈
会計年度任用職員：岡田ひとみ	会計年度任用職員：久保亮二
会計年度任用職員：豊村たまき	会計年度任用職員：小野直子
会計年度任用職員：阿部春香	

【令和5年度】（第27・28・29次整理調査）

市長：和田　裕行

観光文化戦略部長：久保達彦	観光文化戦略部次長：山岸将郎
副参事兼文化財課長：井伊岳夫	副参事兼世界遺産推進室長：小林　隆
課長補佐兼管理係長：西崎和則	副主幹兼世界遺産推進室長補佐：三尾次郎
副主幹兼文化財係長：林　昭男	副主幹：深谷　覚
副主幹：戸塚洋輔	副主幹：田中良輔
史跡整備係長：大橋　圭	副主査：斎藤一真
主任：佐々木香会	主任：鎌田希来
主任：内藤　京	技師：川村崚太
技師：岡　智康	
会計年度任用職員：宮崎幹也	会計年度任用職員：樋口杏奈
会計年度任用職員：久保亮二	会計年度任用職員：岡田ひとみ
会計年度任用職員：小野直子	会計年度任用職員：春名英行
会計年度任用職員：佐藤利江	

4．現地調査と整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

第27次現地調査：市直雇用の作業員
久保亮二（調査補助員）

第28次現地調査：市直雇用の作業員
久保亮二（調査補助員）

第29次現地調査：公益社団法人彦根市シルバー人材センターから作業員を派遣いただく。
久保亮二、小野直子（会計年度任用職員）

第27・28・29次整理調査：宮崎幹也、樋口杏奈、久保亮二、岡田ひとみ、小野直子、
佐藤利江（以上、会計年度任用職員）

5．本書で使用した遺構実測図は、林、久保亮二が作成し、遺物実測図は、宮崎幹也、沖田陽一、樋口杏奈が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、林が行った。

6．本書の執筆及び編集は、林が行った。

7．本書で使用した方位は真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

8．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している

9．本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。

土師器・陶器□　　須恵器■

目　次

巻頭図版
例言

第１章　序　論
第１節　調査に至る経緯と経過 ―― 1
(1) 調査に至る経緯 ―― 1
(2) 発掘調査の経過と方法 ―― 2
(3) 整理調査の経過と方法 ―― 2
第２節　地理的・歴史的環境 ―― 3
(1) 地理的環境 ―― 3
(2) 歴史的環境 ―― 7
(3) 福満遺跡の概要と既往調査 ―― 9

第２章　第27次調査の成果
第１節　基本土層 ―― 13
第２節　検出遺構と遺物 ―― 14
(1) 概　要 ―― 14
(2)　溝 ―― 14
(3) 土　坑 ―― 14
(4) 小　穴 ―― 14
(5) その他 ―― 18
(6) 小　結 ―― 19

第３章　第28次調査の成果
第１節　基本土層 ―― 20
第２節　検出遺構と遺物 ―― 20
(1) 概　要 ―― 20
(2) 竪穴建物 ―― 20
(3) 掘立柱建物 ―― 23
(4)　溝 ―― 26
(5) 土　坑 ―― 28
(6) その他 ―― 32
(7) 小　結 ―― 33

第４章　第29次調査の成果
第１節　基本土層 ―――― 36
第２節　検出遺構と遺物 ―――― 36
(1) 概　要 ―――― 36
(2) 掘立柱建物 ―――― 36
(3)　溝 ―――― 38
(4) 小　結 ―――― 38

第５章　総　括
第１節　第27・28・29次調査の成果と課題 ―――― 39

図版
報告書抄録

第1章　序　論

第1節　調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

本書は、公共事業に伴い実施した福満遺跡第27・28・29次（彦根市小泉町　地先）発掘調査の成果をまとめたものである。

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。犬上川下流域右岸、同河川が形成する扇状地下方の湧水帯の標高約95mに位置する。当該遺跡の東方約600mの位置にJR琵琶湖線が南北に縦貫しており、南彦根駅へのアクセスにも適した立地である。このような利便性の高い地域ゆえに、周辺地域は商業施設や宅地造成、集合住宅などの開発が進んでおり、市内でも市街地化が進んでいる地域の一つである。今回の調査地点に関しても、開発計画以前は宅地や工場用地としての土地利用がなされていた場所である。

今回の記録保存を目的とする発掘調査は、彦根市が計画した市道小泉城南小学校線道路改良工事に先立ち提出された文化財保護法第94条の通知（平成30年8月1日付け）及び調査依頼（平成30年8月1日付け）に基づくものである。当該地は、過去に別の開発計画に基づく試掘調査（平成28年11・12月実施）で遺構・遺物を確認している範囲であったため、今回の開発に伴

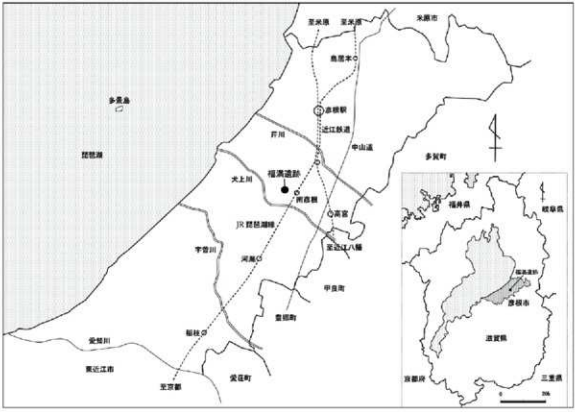


図1　福満遺跡の位置図

い記録保存調査の対象範囲とした。第27次調査の対象面積は約103㎡で、現地の発掘調査は平成31年4月15日に着手し、令和元年6月25日まで実施した。第28次調査の対象面積は約308㎡で、現地の発掘調査は令和元年7月3日に着手し、令和元年10月31日まで実施した。第29次調査の対象面積は約115㎡で、現地の発掘調査は令和2年4月8日に着手し、令和2年6月30日まで実施した。整理調査に関しては、令和5年4月27日～令和6年3月31日まで行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、市の開発担当部局・近隣住民を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

(2) 発掘調査の経過と方法

現地の発掘調査実施にあたり、市の開発担当部局と調査担当部局間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（第27次：平成31年4月15日付け、第28次：令和元年7月3日付け、第29次：令和2年4月8日付け）を取り交わし、契約締結後に現地調査を開始した。

調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構面直上まで重機による掘削を行い、その後の調査は人力により行った。調査に伴うグリッド設定については、第27～30次調査（第30次調査も公共事業に伴い発掘調査を実施した。本書とは別報告）が近隣で実施されたため共通で設定した。図化作業の効率を勘案して掘削範囲の平面形状に沿う任意の方位でグリッド設定を行い、グリッドの基準となる複数点に平面直角座標値を落とした。グリッド番号は北西端から南東側に向かってアルファベットを付け、北東端から南西側に向かって数字を付した。遺物は基本的に遺構・土層ごとに取り上げたが、遺構を伴わない遺物の取り上げはグリッドごとに行い、北隅にあるグリッド杭の番号を代表させた。遺構図はグリッドを基準に、1/100の遺構分布図と1/20の遺構平面図を基本とし、状況に応じて1/10の遺物出土状況図等を作成したほか、1/20の調査区および遺構の土層断面図を手実測により作成した。遺構の名称については、文化庁発行の『発掘調査の手引き―集落遺跡発掘編―』記載の略号を用いている。これと遺構番号の組み合わせで遺構名とするが、遺構番号は遺構の種別ごとに番号を与えるのではなく、種別に関わらず1から通し番号を付した（今回の場合は、各次数の調査地ごとに1から通し番号を与えている）。これにより、各遺構に固有の番号を与えることになり、調査の途上、あるいは整理の過程で遺構の種類に関わる解釈の変更があった場合にも、略号のみを変更し、番号を変更することなく対応できる。ただし、掘立柱建物や柵、道路遺構など複数の遺構が一体で構成されるものについては、その遺構種別ごとに1から通し番号を付与した。現地の発掘調査だが、第27次調査は平成31年4月15日から令和元年6月25日まで、第28次調査は令和元年7月3日から令和元年10月31日まで、第29次調査は令和2年4月8日から令和2年6月30日まで実施した。

(3) 整理調査の経過と方法

整理調査の実施にあたり、市の開発担当部局と調査担当部局間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（令和5年4月27日付け）を取り交わし、契約締結後に整理調査を開始した。

遺構図は原図作成ののちトレースを行い、図版の作成を行った。遺物は、洗浄・注記・接

合・選別・実測、そして原図作成ののちトレースを行い図版の作成を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。同時に調査成果の検討・文章作成・全体の編集作業を行い報告書の刊行となった。

整理調査に関しては、令和5年4月27日に着手、令和6年3月31日まで実施した。これらの一連の発掘調査・整理調査によって得られた資料および成果物については彦根市で保管している。

第２節　地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境（図1・2）

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に位置する縄文時代前期から中世の遺跡である。遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ犬上川の下流右岸に位置する。犬上川は滋賀県東部を流れる流域面積105.3㎢、流路長27.3㎞を測る一級河川である。源を鈴鹿山中の鞍掛峠と角井峠に発し、湖東平野を潤して彦根市中央部で琵琶湖にそそぐ。標高130mから100mにかけて多賀町楢崎付近を扇頂とする扇状地を形成しており、降水量の少ないときには、扇頂である標高130mのあたりから標高100mのあたりまでの中流域で伏流し、水無川となる。また、標高100mから90mにかけて再び水が湧出しているが、必ずしも河道に沿って元来の河川水が湧き出しているのではない。調査地は、犬上川扇状地の外側にあたり、標高約94mの湧水帯に位置し、豊かな水に恵まれた地域である。調査地の南東約1㎞の標高97m付近にある扇状地の扇端には伏流水が自噴した湧水池がみられ、南西約0.4㎞の西今町旧集落の中央にあたる朝鮮人街道の交差点南角に『十王の水』と呼ばれる湧水池がみられる。これらの湧水池からでる犬上川の伏流水が下流の用水となっている。犬上川は扇状地上で度々流路を変えていたとみられ、自然堤防あるいは氾濫平野に位置する福満遺跡でも旧河道が過去の調査で確認されている。

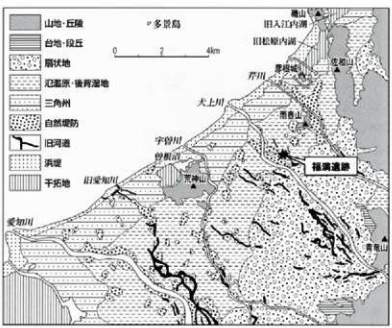


図２　彦根市の自然地形（『新修彦根市史』第１巻より）

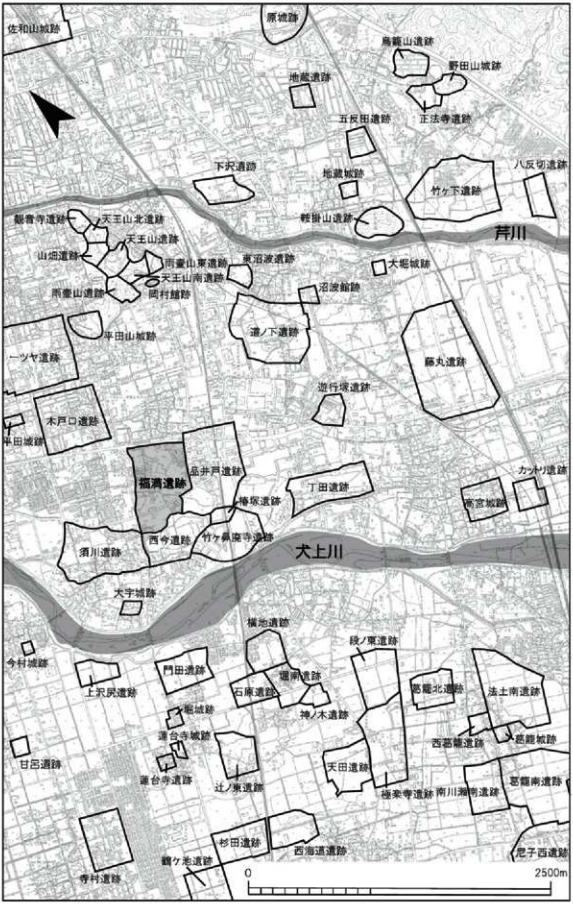


図3　福満遺跡と周辺の遺跡分布図

写真１　福満遺跡周辺の航空写真（平成21年12月1･2日撮影）

表1　福満遺跡周辺の主要遺跡一覧

市番号	県番号 202～	遺跡の名称	所在地		種類	時代	立地	現状	備考
11	090	佐和山城跡	彦根市	佐和山町	城館跡	中世	山頂・山麓・平地	山林・水田	石垣・曲輪・土塁
31	031	鶴田寺遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山頂	山林	
32	032	天王山北遺跡	彦根市	芹川町	散布地	古墳～平安	山頂	山林	
33	010	山畑遺跡	彦根市	和田町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳？
34	033	天王山遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山腹	山林	
35	034	天王山南遺跡	彦根市	芹川町	散布地	中世	山麓	山林	古墳？
36	038	雨壱山遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳？
37	039	雨壱山東遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	中世	山麓	山林	古墳？
42	007	一ツヤ遺跡	彦根市	平田町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
43	006	本戸口遺跡	彦根市	平田町	散布地	縄文～中世	平地	水田・宅地	
44	037	山之脇遺跡	彦根市	山之脇町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
45	044	下沢遺跡	彦根市	西沼波町	散布地	古墳	平地	水田・宅地	
46	046	地蔵遺跡	彦根市	地蔵町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	円墳
47	047	五反田遺跡	彦根市	正法寺町	散布地	古墳	平地	水田	
48	048	鳥籠山遺跡	彦根市	正法寺町	窯跡	奈良	山麓	山林・水田・宅地	瓦窯跡
49	049	正法寺遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	平地	水田	
51	018	須川遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
52	**015**	**福満遺跡**	**彦根市**	**西今町**	**集落跡**	**縄文～中世**	**平地**	**水田・宅地**	**竪穴建物・土坑・溝・古墳**
53	016	西今遺跡	彦根市	西今町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	旧西今東遺跡
54	012	品井戸遺跡	彦根市	小泉町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	竪穴住建物・石帯
55	013	柳塚遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	古墳か？
56	014	竹ヶ鼻泉寺遺跡	彦根市	竹ヶ鼻町	寺院・集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
57	043	瀧ノ下遺跡	彦根市	東沼波町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地・工場跡	
58	139	下田遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	埋設土器・鐵軍大珠
59	042	東沼波遺跡	彦根市	東沼波町	古墳	古墳	平地	畑地	
60	138	遊行塚遺跡	彦根市	高宮町	散布地	奈良	平地	宅地	高宮後寺跡？
61	052	竹ヶ下遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
62	041	藤丸遺跡	彦根市	大堀町・高宮町	集落跡	古墳～中世	平地	水田・宅地	
63	053	八反切遺跡	彦根市	野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
64	140	高宮遺跡	彦根市	高宮町	城館跡	中世	平地	宅地・学校用地	
65	141	カッパ遺跡	彦根市	高宮町	散布地	古墳～平安	平地	水田	（多賀町）
69	055	甘呂遺跡	彦根市	甘呂町	寺院跡	古墳～中世	平地	水田	甘露寺跡伝承
70	019	上沢民遺跡	彦根市	野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
71	129	門田遺跡	彦根市	堀町	散布地	古墳～奈良	平地	水田	
72	127	瀧谷寺遺跡	彦根市	瀧谷寺町	城館跡	中世	平地	畑地・宅地	
73	063	寺村遺跡	彦根市	日夏町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
76	130	横地遺跡	彦根市	堀町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	円墳
77	124	石原遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
78	125	辻ノ東遺跡	彦根市	辻堂町	散布地	古墳～奈良	平地	水田・畑地・校地	
79	123	神ノ木遺跡	彦根市	金龍寺町	集落跡	縄文～奈良	平地	水田・社地	円墳
81	117	鶴ヶ池遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・道路	
82	118	杉田遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・工場用地	
83	119	西海遺遺跡	彦根市	川瀬馬場町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地	
84	120	天田遺跡	彦根市	梅龍寺町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畑地・宅地	
85	121	梅龍寺遺跡	彦根市	梅龍寺町	集落跡	古墳～奈良	平地	水田・宅地	
86	122	段ノ東遺跡	彦根市	森堂町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	
87	110	葛籠北遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳群・集落跡	古墳～中世	平地	水田・畑地・校地	円墳
88	111	西葛籠遺跡	彦根市	西葛籠町	古墳	古墳	平地	宅地	円墳
140	131	堀南遺跡	彦根市	堀町	集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
141	109	法士南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
142	115	南川瀬南遺跡	彦根市	川瀬馬場町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	
143	108	葛籠南遺跡	彦根市	葛籠町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
146	197	尼子西遺跡	彦根市	出町	集落跡	奈良・平安	平地	宅地	
153	008	平田城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地	
154	009	平田山城跡	彦根市	平田町	城館跡	中世	平地	宅地・社地	
155	011	小泉城跡	彦根市	小泉町	城館跡	中世	平地	宅地	
156	021	大字城跡	彦根市	字尾町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
159	035	沼波館跡	彦根市	東沼波町	城館跡	中世	平地	水田	
160	036	岡村館跡	彦根市	岡町	城館跡	中世	平地	山林・宅地	
161	040	大堀城跡	彦根市	大堀町	城館跡	中世	平地	水田	
162	045	地蔵城跡	彦根市	地蔵町	城館跡	中世	平地	水田	
163	051	野田山城跡	彦根市	野田山町	城館跡	中世	平地	山林	瓦窯跡
165	056	今村城跡	彦根市	開出今町	城館跡	中世	平地	水田・宅地	
174	094	原城跡	彦根市	原町	城館跡	中世	山頂	その他	
180	107	葛籠城跡	彦根市	葛籠町	城館跡	中世	平地	宅地	
182	126	瀧谷寺城跡	彦根市	瀧谷寺町	城館跡	中世	平地	宅地	
183	128	堀城跡	彦根市	堀町	城館跡	中世	平地	水田	
203	200	鞭掛山遺跡	彦根市	正法寺町	古墳	古墳	山頂	山林	埴輪片表採の報告あり

(2) 歴史的環境（図3・表1、写真1）

縄文時代　屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代　前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺遺跡や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曽川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴建物を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曽川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。また、愛知川流域の稲部遺跡・稲部西遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする拠点集落が確認されている。

古墳時代　古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曽遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・甚籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。南部では、愛知川と宇曽川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稲部遺跡や長野遺跡（愛荘町）でも同時期の集落が形成される。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なまず遺跡（愛荘町）で6世紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。

白鳳～奈良時代　7世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡・丁田遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定東山道が通

過しており、交通・流通面において重要な地域であったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

宇曽川以南では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領覇流荘の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る墾田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、覇流荘が成立した。また、延久２（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡2条７里・8里・3条16里に弘福寺領平流荘が存在したことが記されており、さらに和銅2（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田壱拾壱町壱段参拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流荘は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曽川流域では、少し上流側の長野遺跡・なまず遺跡・斉掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産緑釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

中世　中世では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中にあって、宇曽川流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曽川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曽川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では、道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも、日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では、北の京極・浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し、市域一帯は、ちょうど両勢力がぶつかり合う地理的関係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に営まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的重要性より、その後も織田勢力、豊臣勢力へと引き継がれていく。

(3) 福満遺跡の概要と既往調査（図4、表2）

福満遺跡は、彦根市西今町・小泉町に所在する縄文時代から中世の複合遺跡である。鈴鹿山系から流れる犬上川右岸の標高94mの扇状地の扇端部に立地している。遺跡周辺は、国道8号線とJR琵琶湖線南草津駅にも近接しており利便性も高いため、近年、宅地化や集合住宅建設などの開発が進んでいるが、開発に伴い過去に26度調査が実施されている。

福満遺跡の調査を振り返ると、第2次調査（城南小学校プール）・第3次調査（宅地造成）で縄文時代前期の大歳山式土器が出土しているほか、中期末から晩期の土器が流路から大量に出土し、包含層も確認されている。いまだ明確な遺構は確認されていないが、当時の集落がこの地にあったことがうかがえる。

弥生時代以降では、第23次調査（彦根市スポーツ・文化交流センター本体建設）で前期の竪穴建物が、第25次調査（宅地造成）では中期の方形周溝墓群が確認されている。第4次調査（城南幼稚園改築）や第7次調査（城南小学校校舎増築）、福満遺跡東隣にあたる品井戸遺跡では、第1次調査（団地造成）で庄内式並行期の土器が出土しており、第4次調査（市道改良）では竪穴建物も検出されていることから当時の集落が福満遺跡にもあった可能性は高い。なお、福満遺跡第5次調査（産業振興センター：燦ぱれす）・第8次調査（集合住宅）・第18次調査（集合住宅）で弥生時代後期から古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が検出されており、品井戸遺跡でも第2次調査（市道建設）で方形周溝墓が検出されていることから、弥生時代後期以降の集落と墓域がセットで確認されている。また、福満遺跡第13次調査（個人住宅）でも時期は判然としないが方形周溝墓が確認されている。第23次調査地では、古墳時代前期から竪穴建物が確認されているが、後期に入ると遺構が大規模に展開される状況が確認されている。同時期の竪穴建物は第1・4次調査でも確認されており、第1次調査では子持ち勾玉が土坑から須恵器とともに出土している。同時期の古墳だが、今回の調査地の北隣で実施された第12次調査（宅地造成）で土坑墓が2基、第18次調査で古墳の周濠が確認されており、古墳時代後期においても集落と墓域がセットで確認されている。

奈良・平安時代には福満遺跡の位置は犬上郡の高宮郷あるいは竇田郷に含まれていた。第1次調査で奈良時代後半の須恵器が土坑から出土しており、第4次調査では平安時代頃とみられる掘立柱建物が数棟検出されている。第23次調査では、倉庫を含む掘立柱建物が複数棟整然と並ぶ状況が確認されており、一般集落とは異なる様相を示し、役人や位の高い人の出入りするような施設、また、物資の集約とともにそれらを管理するような施設が周辺一帯に広がっていたと推定されている。

以上の状況から福満遺跡について、縄文時代後期・晩期については遺物だけではなく具体的な建物などの遺構の確認、弥生時代後期から古墳時代前期、そして後期にかけては東隣の品井戸遺跡も含めた集落・墓域の範囲の確認などが課題となろう。また、奈良・平安時代には第23次調査成果を中心に、当時の犬上郡衙である可能性が極めて高い竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡との関係をも展望に入れた、継続的な調査・研究が必要になると思われる。

図4　福満遺跡の各調査区位置図

表 2　福満遺跡の発掘調査一覧

次数	調査地/調査原因	現地調査期間	調査主体	主な時代	主な検出遺構・遺物	文献
1	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	1981年4月 ～ 1981年7月	彦根市教育委員会	縄文時代前期末-晩期後半 古墳時代後期、平安時代	河道、竪穴建物、溝、土坑、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、石器、石製品 子持勾玉	1・2・3
2	西今町380番地 市立城南小学校プール改築工事	1982年10月 ～ 1982年12月	彦根市教育委員会	縄文時代後期末～ 晩期前半-晩期後半 奈良～平安時代	河道、掘立柱建物、小穴 縄文土器、石器・石製品、土師器、須恵器、 灰釉陶器	1・2
3	西今町字久保田386 宅地造成工事	1982年12月 ～ 1983年3月	彦根市教育委員会	縄文時代中期末～後期前葉	落ち込み状遺構 縄文土器	1・2
4	西今町285-1 城南保育園改築工事	1986年6月 ～ 1986年7月	彦根市教育委員会	弥生時代後期後半～ 古墳時代初頭 古墳時代後期、平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、小穴 土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、山茶碗	4
5	小泉町字福満640番地 産業振興センター建設工事	1988年7月 ～ 1988年9月	彦根市教育委員会	奈良時代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、小穴、 方形周溝墓 土師器、須恵器	—
6	小泉町字福満640番地 産業振興センター建設工事	1989年12月 ～ 1990年3月	彦根市教育委員会	古墳時代前期	小穴 土師器	—
7	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	1990年6月 ～ 1990年6月	彦根市教育委員会	弥生時代後期～古墳時代初頭 古墳時代後期	掘立柱建物、溝、土坑 土師器	5
8	西今町字九文目370-1 集合住宅建設工事	1993年7月 ～ 1993年8月	彦根市教育委員会	古墳時代初頭-後期	掘立柱建物、溝、土坑、小穴 土師器、須恵器	—
10	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	2005年11月 ～ 2005年11月	彦根市教育委員会	古墳時代初頭-後期	柱、溝、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、土製品、瓦	6
11	西今町380番地 市立城南小学校増改築工事	2006年12月 ～ 2007年3月 2007年5月 ～ 2007年6月	彦根市教育委員会	古墳時代初頭-後期	溝、土坑、小穴 土師器、須恵器、緑釉陶器、土製品	6
12	西今町字小横ヶ坂298-1,298-2,299 宅地造成工事造成工事	2013年6月 ～ 2013年7月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	土坑墓、溝、小穴 縄文土器、須恵器、石器	7
13	西今町字小坂ヶ横298番1 個人住宅建設工事	2013年11月 ～ 2013年12月	彦根市教育委員会	古墳時代 奈良～平安時代	竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑、小穴、 方形周溝墓 土師器、須恵器、石器、銅片	8
14	西今町字小横ヶ坂298番13 個人住宅建設工事	2014年4月 ～ 2014年5月	彦根市教育委員会	奈良時代か	柱、小穴 土師器	9
15	西今町字九文目371-6ほか 集合住宅建設工事	2014年6月 ～ 2014年8月	彦根市教育委員会	古墳時代、奈良時代	河道、古墳の周溝 土師器、須恵器、鞴式土器	10
16	西今町字小横ヶ坂299番15 個人住宅建設工事	2015年1月 ～ 2015年2月	彦根市教育委員会	奈良時代	溝、小穴 縄文土器、土師器、須恵器、石器	9
17	西今町字小横ヶ坂306-1ほか 店舗建設工事	2015年10月 ～ 2015年11月	彦根市教育委員会	奈良時代	掘立柱建物、柱、溝、小穴 土師器、須恵器	11
18	小泉町字天王679番 集合住宅建設工事	2015年7月 ～ 2015年11月	彦根市教育委員会	弥生時代終末～古墳時代初頭 古墳時代中期後葉～末頃	竪穴建物、小穴、方形周溝墓、古墳の周溝 土師器、須恵器、埴輪	12
19	西今町字小横ヶ坂298番12ほか 個人住宅建設工事	2015年12月 ～ 2016年1月	彦根市教育委員会	弥生時代終末、奈良時代	小穴 土師器	—
20	西今町298-2 個人住宅建設工事	2016年10月 ～ 2016年11月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	竪穴建物、小穴 土師器、須恵器	—
21	西今町字小横ヶ坂299番15 個人住宅建設工事	2016年10月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	小穴 土師器、須恵器	—
22	西今町298番2ほか 個人住宅建設工事	2017年2月 ～ 2017年3月	彦根市教育委員会	古墳時代後期	小穴 土師器	—
23	小泉町　地先 彦根市スポーツ・文化交流センター 建設付帯工事	2017年8月 ～ 2019年3月	彦根市教育委員会	縄文時代後期、弥生時代後期、 古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、 平安時代、鎌倉時代	河道、竪穴建物、掘立柱建物、柵、溝、井戸、 土坑、小穴 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、 二彩陶器、緑釉陶器、白磁、灰釉陶器、石器、 石製品、木製品、滑石、金属製品	13
24	小泉町字八王子620番41 個人住宅建設工事	2017年11月 ～ 2017年12月	彦根市教育委員会	古墳時代後期 奈良時代	掘立柱建物 土師器、須恵器	—
25	西今町字小横ヶ坂303番地ほか 宅地造成工事	2018年5月 ～ 2018年10月	彦根市教育委員会	弥生時代中期、 奈良時代～平安時代前期、 中世以降	方形周溝墓、掘立柱建物、柵、溝、井戸、土坑、 小穴 弥生土器、土師器、須恵器、石器、灰釉陶器、 石製品、木製品	14
26	西今町、小泉町　地先 彦根市スポーツ・文化交流センター 建設付帯工事	2018年9月 ～ 2019年1月	彦根市教育委員会	弥生時代後期、 古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、 平安時代、鎌倉時代	河道、掘立柱建物、溝、小穴 弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、 木製品	—
27	小泉町 市道改良工事	2019年4月 ～ 2019年6月	彦根市教育委員会	古墳時代	落ち込み状遺構、溝、土坑、小穴 土師器、須恵器	本書
28	小泉町 市道改良工事	2019年7月 ～ 2019年10月	彦根市教育委員会	弥生時代後期～終末期、 古墳時代	竪穴建物、掘立柱建物、溝(周溝)、土坑、小穴 土師器、須恵器、金属製品、石製品	本書
29	小泉町 市道改良工事	2020年4月 ～ 2020年6月	彦根市	奈良時代	掘立柱建物、溝、土坑、小穴 土師器	本書
30	小泉町地先 彦根市スポーツ・文化交流センター 建設付帯工事	2020年4月 ～ 2020年11月	彦根市	奈良時代、平安時代、鎌倉時代	竪穴建物、掘立柱建物、道路遺構、溝、土坑、 小穴 土師器、須恵器、山茶碗	—

文献

1　彦根市　2007『新修彦根市史』第1巻通史編　古代・中世
2　彦根市史考古部会　2004『新修彦根市史』編さんにともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書
3　彦根市教育委員会　1982『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第4集
4　彦根市教育委員会　1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第13集
5　彦根市教育委員会　1991『福満遺跡第7次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告第20集
6　彦根市教育委員会　2008『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集
7　彦根市教育委員会　2015『福満遺跡第12次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集
8　彦根市教育委員会　2015『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集
9　彦根市教育委員会　2019『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市埋蔵文化財調査報告書第76集
10　彦根市教育委員会　2016『福満遺跡第15次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第65集
11　彦根市教育委員会　2017『福満遺跡XVII』彦根市埋蔵文化財調査報告書第69集
12　彦根市教育委員会　2015『福満遺跡発掘調査現地説明会』
13　彦根市教育委員会　2018『福満遺跡（第23次）発掘調査説明会資料』
14　彦根市教育委員会　2020『福満遺跡第25次発掘調査報告書』

参考文献

滋賀県立安土城考古博物館　2006『扇状地の考古学』

彦根市　1960『彦根市』上冊

彦根市　2002『彦根　明治の古地図』二

彦根市　2007『新修彦根市史』第１巻通史編　古代・中世

彦根市　2020『福満遺跡第25次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書82集

彦根市教育委員会　1982『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第4集

彦根市教育委員会　1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第13集

彦根市教育委員会　1991『福満遺跡第7次調査』彦根市埋蔵文化財調査報告第20集

彦根市教育委員会　2008『福満遺跡Ⅹ・Ⅺ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集

彦根市教育委員会　2015『福満遺跡第12次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第59集

彦根市教育委員会　2015『福満遺跡発掘調査現地説明会』

彦根市教育委員会　2015『平成25年度彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第63集

彦根市教育委員会　2016『福満遺跡第15次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第65集

彦根市教育委員会　2017『福満遺跡ⅩⅦ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第69集

彦根市教育委員会　2018『福満遺跡（第23次）発掘調査説明会資料』

彦根市教育委員会　2019『平成26年度彦根市内遺跡発掘調査報告書2』彦根市教育委員会文化財調査報告書第76集

琵琶湖流域研究会　2003『琵琶湖流域を読む 上 ―多様な河川世界へのガイドブック―』

第２章　第27次調査の成果

第１節　基本土層（図５・７・８、写真２）

福満遺跡第27～30次調査の基本層位は、Ⅰ～Ⅴ層に分類できる。Ⅰ層は褐灰色礫、Ⅱ層は灰黄褐色礫混じり粘質土で、Ⅲ層は暗緑灰色粘質土で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層はいずれも近現代造成土である。Ⅳ層はオリーブ灰色粘質土、Ⅴ層は黄褐色粘質土で基盤層である。Ⅴ層上面が遺構検出面となる。調査地一帯は、過去にパルプ関連の工場用地であったため、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は、その工場用地とその後の土地利用の際のものと考えられる。

写真２　第27次調査区南東・南西壁土層断面〔北から〕

第27次調査で検出した遺構面（基盤層）の標高は、調査区南東端で約93.9m、北西端93.7mを測り、東から西に向かってわずかに地形が下がっている状況が読み取れる。この状況は、第27～30次の一連の調査区一帯でも同様の状況であり、地形は南東から北西に向かってわずかに下がっていることが確認された。そのため、一連の調査区の基本土層はⅠ～Ⅴ層であるが、地

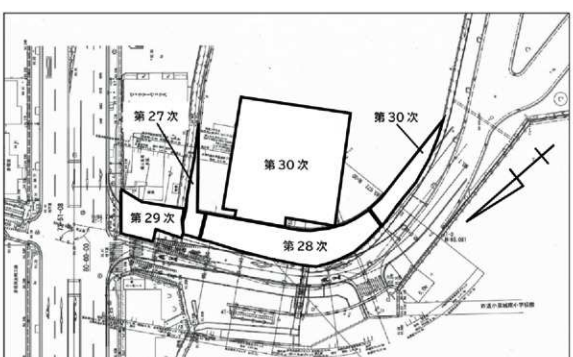


図５　福満遺跡第27・28・29・30次調査区位置図

形が高い南東側では、Ⅳ層がⅢ層造成時に削平を受けているため層として残存しておらず、地形が下がる北西側に向かうにつれて削平を受けなかったⅣ層の堆積が徐々に確認されていく状況である。第27次調査区でも、地形が高い調査区南東側ではⅣ層が残存しておらず、Ⅲ層直下が遺構面（基盤層）であるⅤ層であるが、地形が下がる北西側に向かうにつれてⅣ層の堆積が確認されるようになる状況である。

第２節　検出遺構と遺物

(1) 概要（図6・9）

第27次調査では、遺構は調査区全域で確認されたものの、遺構密度は決して高くなく、調査範囲も狭小であったため、調査で得られた情報は限られたものであった。僅かに落ち込み状遺構や溝、土坑、小穴などが確認された。ここでは各遺構の概要を述べる。

(2) 溝（SD8・SD9）

SD8（図6）

調査区の中央付近で検出された溝である。検出はわずかであるが、検出できている長さは約0.64m、幅約0.63m、深さ約0.08mを測り、断面U字状を呈す。溝の軸方向はN－52°－Eの方位を示し、SD9と同方向の溝である。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。SK7に切られる。

遺物は、出土していない。

SD9（図6・9）

調査区の北西側で検出された溝である。検出はわずかであるが、検出できている長さは約1.95m、幅約0.51m、深さ約0.05mを測り、断面U字状を呈す。溝の軸方向はN－52°－Eの方位を示し、SD9と同方向の溝である。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(3) 土坑（SK7）

SK7（図6）

調査区の中央付近で検出された土坑である。調査区端にかかるため全体を検出できていないが、平面形は隅丸方形と推定される。長辺約1.78m、残存短辺約0.36m、深さ約0.19mを測る。埋土は、灰オリーブ礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(4) 小穴（SP3・SP4）

SP3（図6・9）

調査区の北西端で検出された平面形が楕円形の小穴で、底部に礫が充填されている。長辺約0.73m、短辺約0.48m、深さ約0.04mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

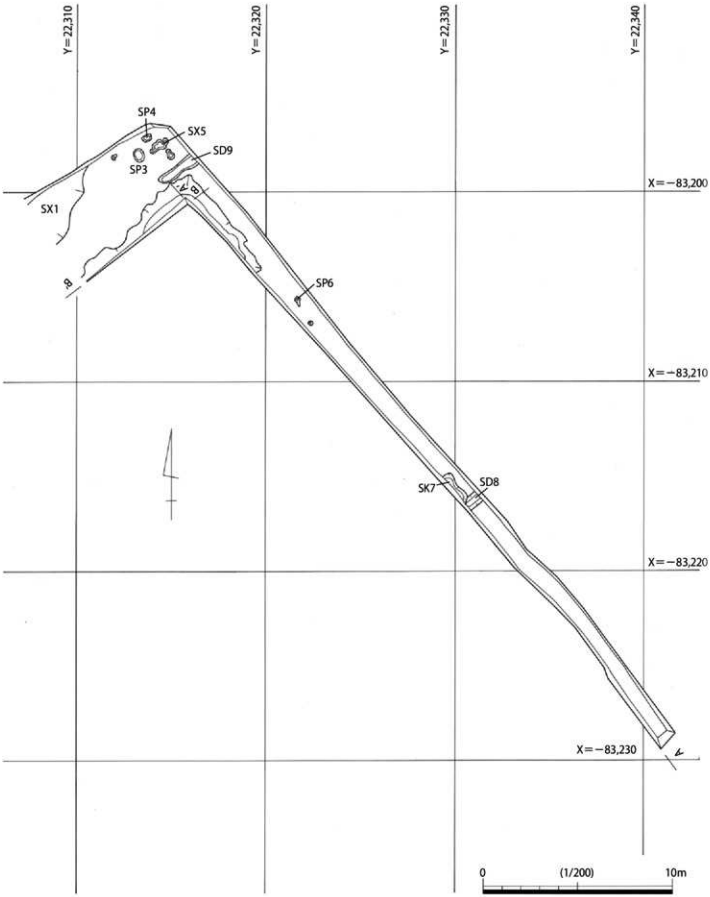
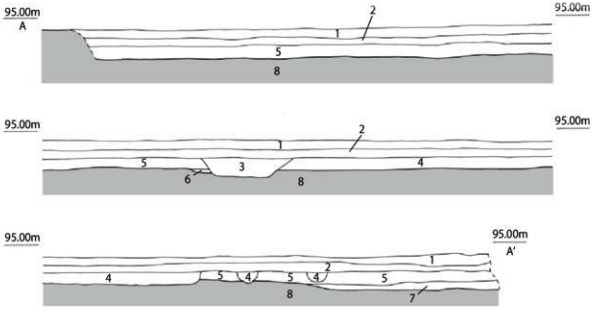


図6　第27次調査区遺構全図



A-A′ 土層断面

1. 褐灰色礫層【Ⅰ層】(近現代造成土)
2. 灰黄褐色礫混じり粘質土【Ⅱ層】(近現代造成土)
3. 灰オリーブ礫混じり粘質土(近現代攪乱)
4. コンクリート基礎(近現代攪乱)
5. 暗緑灰色粘質土【Ⅲ層】(近現代造成土)
6. 褐灰色粘質土
7. オリーブ灰色粘質土【Ⅳ層】
8. 黄褐色粘質土【Ⅴ層】(基盤層)

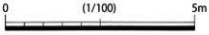
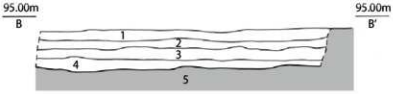


図7　第27次調査区南西壁土層断面図



B-B′ 土層断面

1. 褐灰色礫【Ⅰ層】(近現代造成土)
2. 灰黄褐色礫混じり粘質土【Ⅱ層】(近現代造成土)
3. 暗緑灰色粘質土【Ⅲ層】(近現代造成土)
4. オリーブ灰色粘質土【Ⅳ層】
5. 黄褐色粘質土【Ⅴ層】(基盤層)

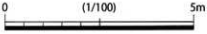


図8　第27次調査区南東壁土層断面図

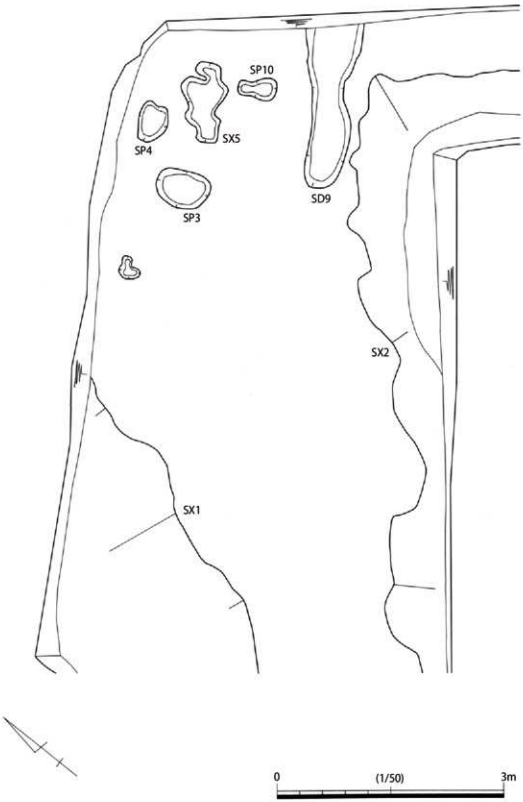


図９　第27次調査区北西地区平面図

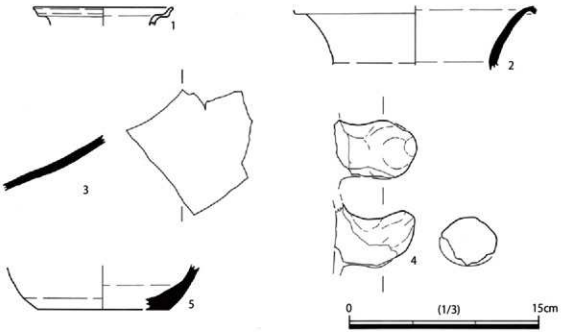


図10　第27次調査区出土遺物実測図

表3　第27次調査区出土遺物一覧

掲載No.	出土地点		器種	器形	部位	残存率	法量(cm) 口径(長さ)	最大径(幅)	底部径(厚さ)	器高	胎土	焼成	色調 外面		内面		備考
1	SX1	1層	土師器	甕	口縁部	10%以下	(11.0)			(1.3)	密	やや軟	浅黄橙	10YR8/3	灰白	5YR8/1	
2	SX1	1層	須恵器	甕	口縁部	10%以下	(19.2)			(4.5)	密	硬質	灰	N4/0	灰	N4/0	
3	SX1	1層	須恵器	甕	体部	10%以下	(9.8)	(9.9)		(0.6)	密	硬質	灰	N4/0	灰白	N7/0	
4	SX1	2層	土師器	甑	把手	10%以下	(5.5)	(4.6)	(3.7)		やや粗	硬質	浅黄橙	7.5YR8/4			胎土:砂粒を多く含む
5	SX1	2層	須恵器	耳皿か	底部	10%以下			(10.4)	(3.5)	緻密	硬質	灰	10Y5/1	灰	N6/0	

※(数値)は残存値

SP4（図6・9）

調査区の北西端で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.50m、短辺約0.37m、深さ約0.21mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(5) その他（SX1）

SX1（図6・9・10・21、表3）

調査区の西端で検出された落ち込み状の遺構である。西隣接地である28次調査のSD16と一連の遺構である。残存幅約2.40m、深さ約0.32mを測る。埋土は、1層：暗灰黄色粘質土、2

層：黒褐色粘質土、3層：灰黄褐色粘質土の3層が確認されている。隣接調査地第28次調査のSD15が円墳の周濠（周溝）と推定されるため、同様の平面形状を持つ28次SX16と27次SX1の一連の遺構も古墳の周濠（周溝）の可能性があると考える。

遺物は、土師器（1・4）と須恵器（2・3・5）が出土した。

1は、土師器の甕の口縁部で、口径は11.0cmを測る。4は、土師器の甑の把手部である。2は、須恵器の甕の口縁部である。5は、須恵器の双耳壺の底部と推定する。底径は10.4cmを測る。遺物はやや時期幅があるが、概ね古墳時代におさまるものである。

(6) 小結

第27次調査区では落ち込み状遺構や溝、土坑、小穴を確認したが、調査区が限られていたこともあり、遺構の詳細な状況は判然としない。落ち込み状遺構SX1の出土遺物より、概ね古墳時代を中心とした遺構がひろがっていたと推定する。また、28次SX16と一連の遺構であるSX1は古墳の周濠（周溝）の可能性があるが、今回の限られた調査範囲では断言はできない。

第３章　第28次調査の成果

第１節　基本土層（図12、写真３）

福満遺跡第27～30次調査の基本層位は、Ⅰ～Ⅴ層に分類できる。Ⅰ層は褐灰色礫、Ⅱ層は灰黄褐色礫混じり粘質土で、Ⅲ層は暗緑灰色粘質土で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層はいずれも近現代造成土である。Ⅳ層はオリーブ灰色粘質土、Ⅴ層は黄褐色粘質土で基盤層である。Ⅴ層上面が遺構検出面となる。調査地一帯は、過去にパルプ関連の工場用地であったため、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は、その工場用地とその後の土地利用の際のものと考えられる。

写真３　第28次調査区南東壁土層断面〔北から〕

第27次調査の基本土層で既述したとおり、第27～30次の一連の調査区の地形は南東から北西に向かってわずかに下がっていることより、調査区南東側では、Ⅳ層がⅢ層造成時に削平を受けているため残存しておらず、地形が下がる北西側に向かうにつれて徐々に堆積が確認される状況である。第28次調査区は、一連の調査区の北西側（地形が低い側）に位置するため、調査区全域でⅣ層が確認され、Ⅳ層直下が遺構面（基盤層）であるⅤ層である。検出した遺構面（基盤層）の標高は、約93.9mを測る。

第２節　検出遺構と遺物

(1) 概要（図11）

第28次調査では、全域で遺構・遺物が検出された。主なものは、弥生時代後期～終末期にかけての竪穴建物、古墳時代後期の古墳の周濠（周溝）と推定される溝と落ち込み状遺構、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物などである。ここでは各遺構の概要を述べる。

(2) 竪穴建物（SH14）

SH14（図13・17～19、表6・7）

調査区の中央付近で検出された竪穴建物である。調査区端にかかるため平面プラン全体を確認できたわけではないが、五角形ないし六角形と推定される。床面は硬質で中央付近には炉と考えられる焼土層・炭化層が広がり、その周囲には4ヶ所の主柱穴が確認される。検出部での最大径は約4.65m、深さは約0.46mを測る。埋土は、1層：黒褐色粘質土、2層：褐色粘質土、3

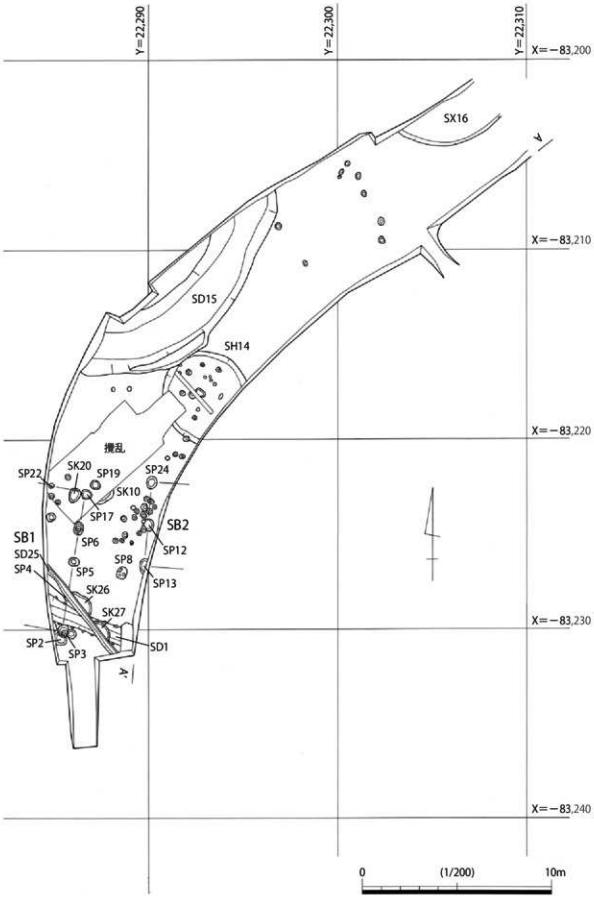
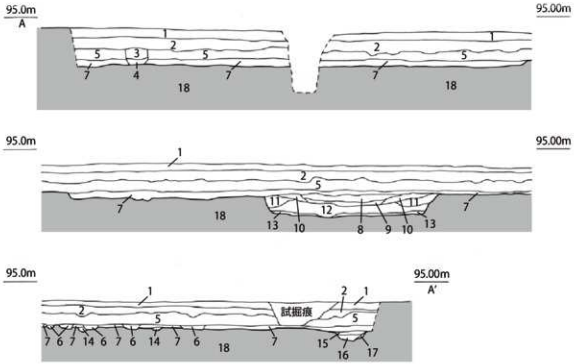


図11　第28次調査区遺構全図



A-A′ 土層断面

1. 褐灰色礫【Ⅰ層】(近現代造成土)
2. 灰黄褐色礫混じり粘質土【Ⅱ層】(近現代造成土)
3. コンクリート基礎(近現代攪乱)
4. 明青灰色礫(近現代攪乱)
5. 暗緑灰色粘質土【Ⅲ層】(近現代造成土)
6. 褐灰色粘質土
7. オリーブ灰色粘質土【Ⅳ層】
8. 黒褐色粘質土(SH14)
9. 灰褐色粘質土(SH14)
10. 褐色粘質土(SH14)
11. 明黄褐色粘質土(SH14)
12. にぶい黄橙色粘質土(SH14)
13. にぶい黄褐色粘質土(SH14)
14. 暗赤褐色粘質土
15. 褐灰色粘質土(SD1)
16. 黒褐色砂礫混じり粘質土(SD1)
17. 灰褐色粘質土(SD1)
18. 黄褐色粘質土【Ⅴ層】(基盤層)

0 (1/100) 5m

図12　第28次調査区南東壁土層断面図

層：にぶい黄褐色粘質土、4層：灰黄褐色粘質土、5層：褐灰色粘質土の5層である。1層は基盤層のブロックや炭化物の混じりが少なく、2～5層は混じりが多い。5層はさらに焼土層の混じりも多い。調査時は1層を上層、2～4層を下層、5層を最下層とし可能な限り層位での取り上げを行った。

遺物は、弥生土器（6～40）、金属製品（41）、石製品（42）が出土した。

6～16・41・42は上層から出土した遺物である。

6～12は弥生土器である。6・7は広口壺、8～10は受口壺、11は二重口縁壺、12は壺の底部、13は甕で、14・15は弥生土器の器台、16は器台または脚台の脚部である。41は用途不明だが棒状の金属製品である。上層からの出土であるが遺構検出面でさらに壁面からの出土のため上層からの混入の可能性がある。42は磨製石斧である。

17～40は下層から出土した遺物である。

17～40は弥生土器である。17は台付壺、18は壺の底部、19・20は受口状口縁甕、21・22は甕、23はくの字状口縁甕、24・25はS字状口縁甕、26は甕の口縁部、27は脚台、28・29は高坏、30・31は器台である。

32～40は最下層から出土した遺物である。

32～40は弥生土器である。32は受口状口縁甕、33～36・38～40は高坏、37は鉢の底部である。33と34、38～40はそれぞれ同一個体と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物から概ね弥生時代後期～終末期と考えられる。

(3) 掘立柱建物（SB1・SB2）

SB1（図14・16、表4～6）

調査区の南西側で検出された掘立柱建物である。SB2と隣接して建っている。調査区端にかかるため建物プラン全体を確認できたわけではないが、梁行1間（約1.46m）以上×桁行4間（約6.00m）、建物面積は約8.76㎡以上の規模を持ち、建物の主軸方向はN－9°－Eの方位をとる。柱間は梁行で約1.46m、桁行で約1.44m～1.56mを測る。柱穴は、SP3～SP6・SP17・SP22で構成され、掘り方の平面形は楕円形と円形で、直径は約0.42～0.61m、深さは0.11～0.37mを測る。建物の角部の柱穴（SP3・SP17）が他の柱穴より深く掘り込まれていることが確認される。

遺物は、SP22から弥生土器（5）が出土している。

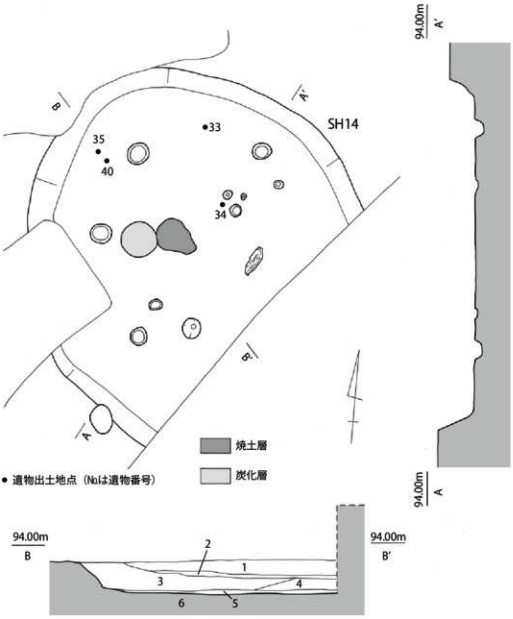
建物の時期は、判然としない。

SB2（図15・16、表4～6）

調査区の南西側で検出された掘立柱建物である。SB1と隣接して建っている。調査区端にかかるため建物プラン全体を確認できたわけではないが、梁行1間以上×桁行2間（約3.6m）の規模を持ち、建物の主軸方向はN－6°－Eの方位をとる。柱間は梁行は不明で、桁行は約1.80mを測る。柱穴は、SP12・SP13・SP24で構成され、掘り方の平面形は楕円形と円形で、直径は約0.39～0.61m、深さは約0.15～0.26mを測る。

遺物は、SP12から土師器の甕（4）が出土している。

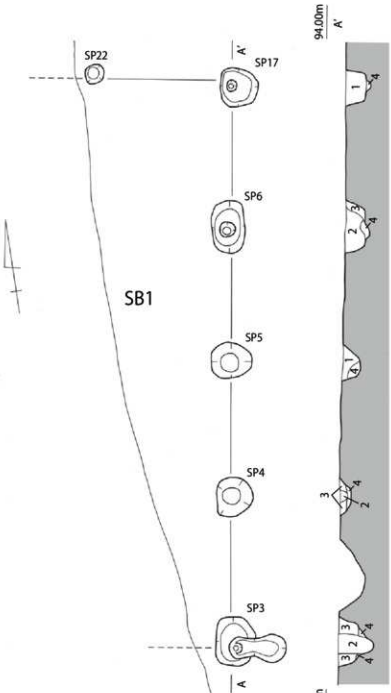
建物の時期は、判然としない。



1. 黒褐色粘質土　地山ブロック～0.5cm大を5%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
3. にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
4. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を20%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
5. 褐灰色粘質土　地山ブロック～3cm大を20%含む
炭化物～1cm大を10%含む
焼土～1cm大を10%含む
6. 明黄褐色粘質土（基盤層）

0　(1/50)　3m

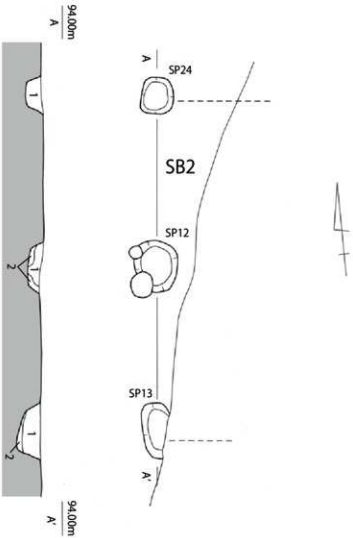
図13　第28次調査区竪穴建物（SH14）平面図・断面図



1. 黒褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を15%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
2. にぶい黄褐色粘質土　地山ブロック～2cm大を40%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
3. 褐灰色粘質土　地山ブロック～1cm大を10%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む
4. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～5cm大を40%含む
　炭化物～0.5cm大を5%含む

0　(1/40)　2m

図14　第28次調査区掘立柱建物（SB1）平面図・断面図



1. 黒褐色粘質土　地山ブロック～3cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 灰黄褐色粘質土　地山ブロック～5cm大を40%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

0　(1/40)　2m

図15　第28次調査区掘立柱建物（SB２）平面図・断面図

(4) 溝（SD1・SD15・SD25）

SD1（図11）

調査区の南西端で検出された溝である。検出できている長さは約3.80m、幅約0.81m、深さ約0.29mを測り、溝の断面はU字状を呈す。溝の両肩には溝に並行するように等間隔の杭の痕跡が確認でき、溝と一体のものであったと考えられる。杭の直径は5～10cmである。埋土は、1

表４　第28次調査区掘立柱建物一覧

建物	梁行×桁行（間）	梁行長（m）	桁行長（m）	床面積（㎡）	主軸方位	挿図	写真図版
SB1	1(以上)×4	1.46(以上)	6.00(以上)	8.76(以上)	N－9°－E	14	5
SB2	1(以上)×2	1.00(以上)	3.60	3.60(以上)	N－6°－E	15	5

表５　第28次調査区掘立柱建物柱穴一覧

建物	遺構	平面形	規模（m）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
			長さ(長幅)	幅(短幅)	深さ				
SB1	SP3	楕円	0.52	0.43	0.37		SP2を切っている。	14	5
	SP4	楕円	(0.20)	(0.18)	0.11		SD25に切られている。	14	5
	SP5	楕円	0.42	0.37	0.19			14	5
	SP6	楕円	0.56	0.35	0.26			14	5
	SP17	円	0.42	0.41	0.27			14	5
	SP22	円	0.61	0.50	0.37	弥生土器（5）		14	5
SB2	SP12	楕円	0.56	0.47	0.15	土師器（4）		15	5
	SP13	楕円	0.61	(0.31)	0.26			15	5
	SP24	円	0.39	0.36	0.18			15	5

（　）内は残存長、又は復元数値

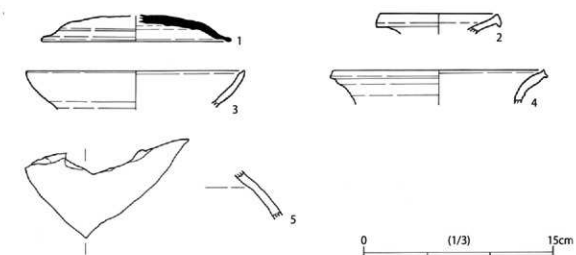


図16　第28次調査区各遺構出土遺物実測図

層：褐灰色粘質土、2層：黒褐色砂礫混じり粘質土、3層：灰褐色粘質土の3層である。SD25、SK26、SK27に切られる。

遺物は、出土していない。

SD15（図20・22、表7）

調査区の中央付近で検出された溝である。調査区端にかかるため全体を検出できていないが、平面形が弧を描くような溝である。検出できている長さは約12m、幅約2.90m、深さ約0.45mを測り、溝の断面は舟底状を呈す。溝の平面形状より古墳（円墳）の周濠（周溝）の可能性が考えられる。埋土は、1層：灰黄褐色粘質土、2層：褐灰色粘質土、3層：にぶい黄褐色粘質土、4層：にぶい黄橙色粘質土、5層：にぶい黄褐色粘質土、6層：灰黄褐色粘質土の6層で

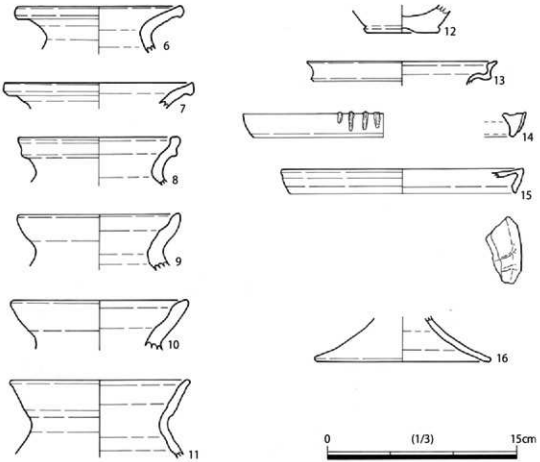


図17　第28次調査区（SH14）出土遺物実測図(1)

ある。調査時は1層を上層、2～6層を下層とし可能な限り層位での取り上げを行った。

遺物は、弥生土器（43・54）、土師器（44～46、51～53、55～57）、須恵器（47・48）、金属製品（50）、石製品（49）が出土した。

43～50は上層から出土した遺物である。

43は弥生土器の受口壺である。44～46は土師器の甕である。47・48は須恵器で、47は坏蓋、48は坏身である。49は石錘、50は用途・器種不明の偏平な金属片である。

51～57は下層から出土した遺物である。

51～53・55は土師器の甕、54は弥生土器の壺、56は土師器の器台、57は土師器の鉢である。

遺構の時期であるが、出土遺物は全体的に時期幅があるため、ここではその中で一番新しい様相を示す須恵器（47・48）より、概ね6世紀後半と考える。

(5) 土坑（SK26・SK27）

SK26（図11・16、表6）

調査区の南西側で検出された土坑である。SD25に切られているため全体を検出できていな

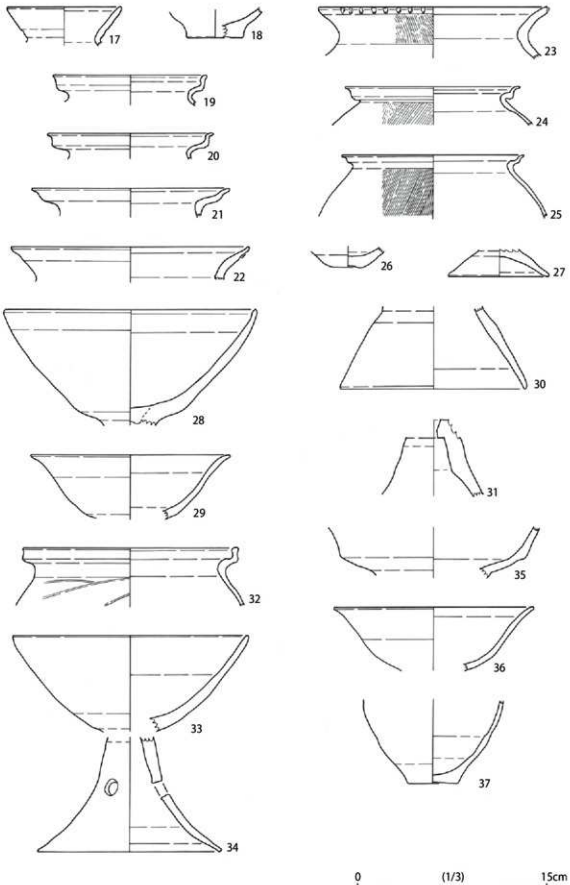


図18　第28次調査区 SH14出土遺物実測図(2)

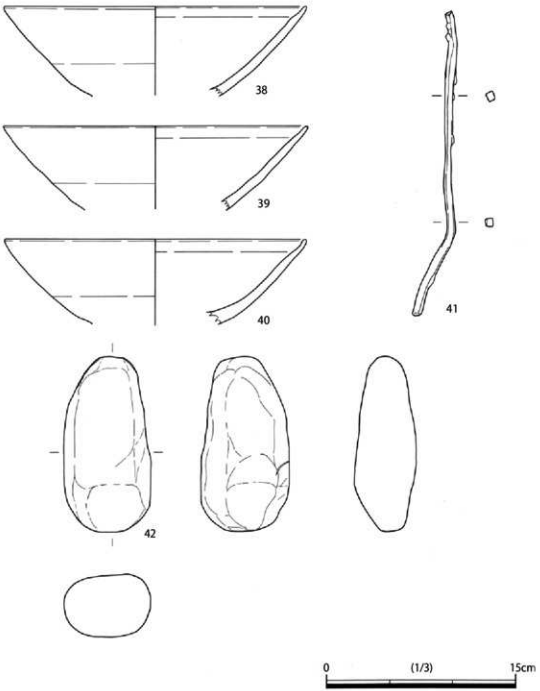


図19　第28次調査区SH14出土遺物実測図(3)

ないが、平面形は楕円形と推定される。長辺約1.39m、残存短辺約0.43m、深さ約0.07mを測る。埋土は、灰褐色粘質土の1層である。

遺物は、須恵器の坏蓋（1）が出土している。

遺構の時期は、8世紀前半と考える。

SK27（図11）

調査区の南西側で検出された土坑である。SD25に切られているため全体を検出できていな

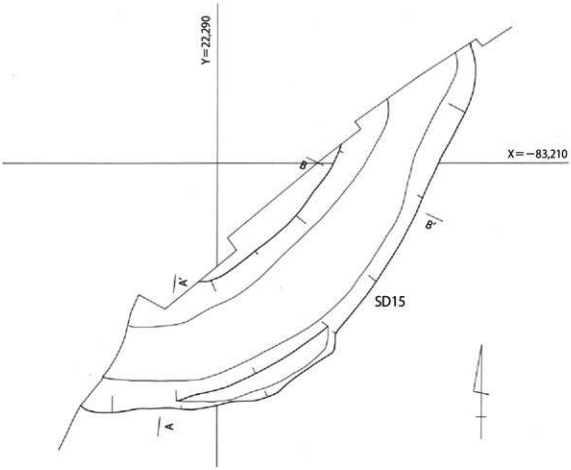


図20　第28次調査区溝（SD15）平面図・断面図

いが、平面形は楕円形と推定される。長辺約1.13m、残存短辺約0.33m、深さ約0.33mを測る。

埋土は、灰褐色粘質土の1層である。

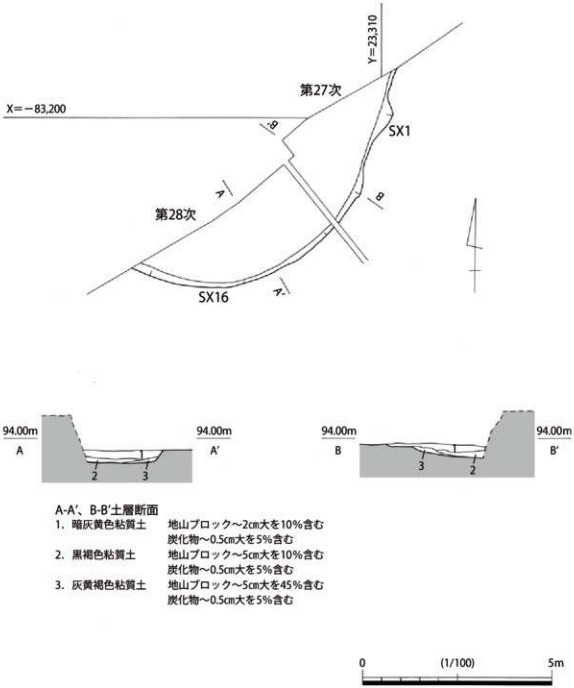


図21　第28次調査区落ち込み状遺構（SX16）平面図・断面図

遺物は、出土していない。

(6) その他（SX16）

SX16（図21・22、表7）

調査区の北東端で検出された落ち込み状の遺構である。北東隣接地である27次調査のSX1と一連の遺構である。残存幅約2.16m、深さ約0.34mを測る。埋土は、1層：暗灰黄色粘質土、2

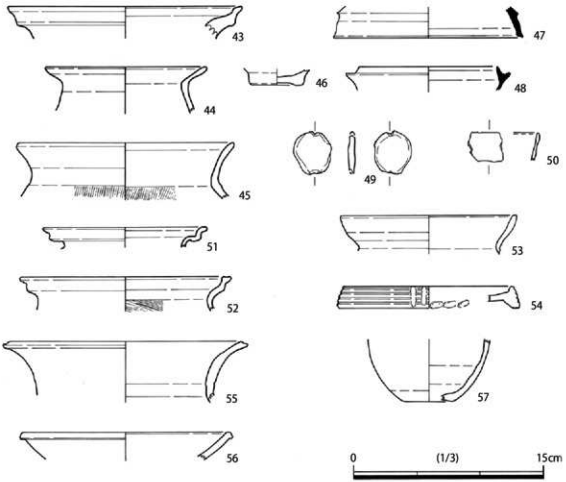


図22　第28次調査区SD15・SX16出土遺物実測図

層：黒褐色粘質土、3層：灰黄褐色粘質土の3層が確認されている。南西に隣接するSD15が円墳の周濠（周溝）と推定されるため、同様の平面形状を持つ28次SX16と27次SX1の一連の遺構も古墳の周濠（周溝）の可能性があると考える。

遺物は、土師器（55～57）が出土している。

55～57は土師器で55は甕、56は器台、57は鉢である。

(7) 小結

第28次調査区では、複数の時期の遺構が確認された。主に確認された遺構は、弥生時代後期～終末期と考えられる平面多角形の竪穴建物が1棟、古墳時代後期の古墳の周濠（周溝）と推定される平面弧状の溝（SD15）と落ち込み状遺構（SX16）、詳細な時期は判然としないが、正南北方位からやや東に軸を振る掘立柱建物を2棟である。

上記のとおり、第28次調査区では調査範囲が限られているにも関わらず、多様な時期・性格の遺構が確認された。

表６　第28次調査区出土遺物一覧(1)

掲載No.	出土地点		器種	器形	部位	残存率	法量(cm) 口径（長さ）	最大径（幅）	底部径（厚さ）	器高	胎土	焼成	色調 外面		内面		備考
1	SK26		須恵器	坏蓋	口縁部～体部	10%以下	(14.8)			(2.1)	密	やや軟質	灰白	N8/0	灰白	N7/0	
2	SP28		土師器	壺	口縁部	10%以下	(9.2)			(1.6)	密	硬質	灰白	7.5YR8/2	浅黄橙	7.5YR8/3	
3	SP2		土師器	甕	口縁部	10%以下	(17.0)			(3.0)	密	硬質	黄橙	10YR8/6	灰白	5YR8/2	
4	SP12		土師器	甕	口縁部	10%以下	(16.6)			(2.6)	緻密	硬質	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	
5	SP22		弥生土器	壺	体部	10%以下				(7.7)	密	硬質	橙	5YR7/6	褐灰	5YR5/1	胎土：砂粒を多く含む
6	SH14	上層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(13.0)			(3.7)	密	やや軟質	淡橙	5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	胎土：砂粒を多く含む
7	SH14	上層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(14.8)			(2.0)	密	やや軟質	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	
8	SH14	上層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(12.6)			(3.7)	密	硬質	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	胎土：砂粒を多く含む
9	SH14	上層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(12.6)			(4.5)	密	やや軟質	浅黄橙	7.5YR8/4	橙	5YR7/8	胎土：砂粒を多く含む
10	SH14	上層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(13.6)			(3.9)	密	硬質	橙	5YR7/8	橙	2.5YR7/8	胎土：直径3mm以下の砂粒を含む
11	SH14	上層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(13.6)			(6.1)	密	硬質	橙	5YR7/6	浅黄橙	7.5YR8/3	胎土：直径3mm以下の砂粒を含む
12	SH14	上層	弥生土器	壺	底部	10%以下			(5.6)	(2.2)	密	硬質	浅黄橙	7.5YR7/3	灰白	7.5YR8/2	胎土：砂粒を多く含む
13	SH14	上層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(14.8)			(1.8)	密	硬質	浅黄橙	7.5YR8/4	橙	5YR7/6	胎土：砂粒を多く含む
14	SH14	上層	弥生土器	器台	口縁部	10%以下	(22.2)			(1.9)	密	やや軟質	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	胎土：直径3mm以下の砂粒を含む
15	SH14	上層	弥生土器	器台	口縁部	10%以下	(19.0)			(1.9)	密	やや軟質	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	胎土：砂粒を多く含む
16	SH14	上層	弥生土器	器台か高坏	脚部	10%以下			(14.0)	(3.5)	密	硬質	灰白	5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	
17	SH14	下層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(9.0)			(3.0)	密	硬質	灰白	7.5YR8/1	灰白	5YR8/1	
18	SH14	下層	弥生土器	壺	底部	10%以下			(4.4)	(2.4)	密	硬質	灰白	7.5YR8/1	浅黄橙	7.5YR8/4	胎土：砂粒を多く含む
19	SH14	下層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(11.8)			(2.3)	密	やや軟質	灰白	5YR8/2	明赤灰	2.5YR7/2	
20	SH14	下層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(13.0)			(2.0)	密	硬質	灰白	5YR8/2	浅黄橙	7.5YR8/3	胎土：砂粒を多く含む
21	SH14	下層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(15.6)			(2.3)	密	やや軟質	橙	2.5YR7/6	橙	5YR7/6	胎土：直径3mm大の砂粒を含む
22	SH14	下層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(18.6)			(2.8)	密	硬質	橙	2.5YR6/8	橙	2.5YR6/8	胎土：砂粒を多く含む
23	SH14	下層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(18.0)			(4.0)	密	硬質	灰白	7.5YR8/2	灰白	10YR8/2	
24	SH14	下層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(13.8)			(3.0)	密	硬質	褐灰	10YR4/1	黒	10YR2/1	胎土：砂粒を多く含む
25	SH14	下層	弥生土器	甕	口縁部	10%以下	(14.2)			(5.0)	密	硬質	灰白	2.5YR8/1	褐灰	10YR5/1	胎土：砂粒を多く含む
26	SH14	下層	弥生土器	甕	底部	10%			(2.0)	(1.7)	密	硬質	浅黄橙	7.5YR7/4	橙	5YR7/6	
27	SH14	下層	弥生土器	台付鉢か	脚部	80%			(7.8)	(2.1)	緻密	硬質	灰白	2.5YR8/1	灰白	2.5YR8/1	
28	SH14	下層	弥生土器	高坏	口縁部～基部	10%	19.8			(9.0)	密	やや軟質	橙	5YR7/6	橙	2.5YR7/8	胎土：直径2mm大の砂粒を多く含む
29	SH14	下層	弥生土器	高坏	口縁部～体部	10%	(15.4)			(5.0)	密	硬質	橙	5YR7/6	浅黄橙	7.5YR8/3	胎土：砂粒を多く含む

※(数値)は残存値

表 7　第28次調査区出土遺物一覧(2)

掲載No.	出土地点		器種	器形	部位	残存率	法量(cm) 口径(長さ)	最大径(幅)	底部径(厚さ)	器高	胎土	焼成	色調 外面		色調 内面		備考
30	SH14	下層	弥生土器	器台	脚部	10%以下			(14.6)	(6.5)	密	硬質	浅黄橙	7.5YR8/3	灰白	5YR8/2	胎土：砂粒を多く含む
31	SH14	下層	弥生土器	器台	脚部	10%以下				(6.1)	緻密	硬質	にぶい黄橙	10YR7/2	灰白	7.5YR8/2	
32	SH14	最下層	弥生土器	壺	口縁部	10%	(16.8)			(4.6)	密	やや軟質	灰白	7.5YR8/2	灰白	10YR8/1	胎土：砂粒を多く含む
33	SH14	最下層	弥生土器	高坏	口縁部～基部	90%	(18.4)			(17.0)	密	硬質	橙	5YR7/6	橙	5YR7/8	胎土：直径5mm大の砂粒を含む
34	SH14	最下層	弥生土器	高坏	脚部	90%			14.2	(17.0)	密	硬質	橙	5YR7/6	橙	5YR7/8	胎土：直径6mm大の砂粒を含む
35	SH14	最下層	弥生土器	高坏	坏部	10%				(4.0)	密	硬質	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	
36	SH14	最下層	弥生土器	高坏	口縁部～体部	10%	(15.6)			(5.0)	密	硬質	橙	5YR7/6	淡橙	5YR8/3	胎土：砂粒を多く含む
37	SH14	最下層	弥生土器	鉢	底部	60%			4.0	(6.6)	密	やや軟質	橙	2.5YR6/8	橙	2.5YR7/8	胎土：直径7mm大の砂粒を含む
38	SH14	最下層	弥生土器	高坏	口縁部～体部	20%	(23.8)			(7.0)	密	やや軟質	橙	5YR7/8	橙	2.5YR7/8	胎土：砂粒を多く含む
39	SH14	最下層	弥生土器	高坏	口縁部～体部	10%	(23.8)			(6.5)	密	やや軟質	橙	5YR7/8	橙	2.5YR7/8	胎土：砂粒を多く含む
40	SH14	最下層	弥生土器	高坏	口縁部～体部	10%	(23.8)			(6.8)	密	やや軟質	橙	5YR7/8	橙	2.5YR7/8	胎土：砂粒を多く含む
41	SH14	上層	金属製品	不明			24.7	7.0	5.0								調査区壁面内出土
42	SH14	上層	石製品	石斧		完形	13.8	7.0	4.9				明褐灰	7.5YR7/1			
43	SD15	上層	弥生土器	壺	口縁部	10%以下	(18.4)			(2.5)	密		橙	7.5YR7/6	淡黄	5YR8/3	胎土：砂粒を多く含む
44	SD15	上層	土師器	甕	口縁部	10%以下	(12.6)			(3.7)	密	やや軟質	橙	5YR7/6	にぶい橙	7.5YR7/4	胎土：砂粒を多く含む
45	SD15	上層	土師器	甕	口縁部	10%以下	(17.0)			(4.5)	密	硬質	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	胎土：砂粒を多く含む
46	SD15	上層	土師器	甕か	底部	10%以下			(4.0)	(1.3)	密	やや軟質	黄橙	10YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/3	胎土：砂粒を多く含む
47	SD15	上層	須恵器	坏蓋	口縁部	10%以下	(15.0)			(2.5)	密	硬質	灰	N5/6	灰	N6/6	
48	SD15	上層	須恵器	坏身	口縁部	10%以下	(10.8)			(1.9)	密	軟質	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/2	
49	SD15	上層	石製品	石錘		90%	4.3	3.5	0.6				灰白	7.5Y7/1			
50	SD15	上層	金属製品	不明		10%以下	(2.3)	(2.3)	0.3	(2.3)			明褐	7.5YR5/6			
51	SD15	下層	土師器	甕	口縁部	10%以下	(12.8)			(2.7)	密	硬質	灰白	5YR8/1	灰白	10YR8/1	
52	SD15	下層	土師器	甕	口縁部	10%以下	(16.6)			(2.7)	密	硬質	灰白	5YR8/2	灰白	7.5Y8/1	胎土：砂粒を多く含む
53	SD15	下層	土師器	甕	口縁部	10%	(13.6)			(3.1)	密	やや軟質	橙	2.5YR6/8	橙	2.5YR6/6	胎土：直径3mm大の砂粒を含む
54	SD15	下層	弥生土器	壺	口縁部	10%	(13.2)			(1.3)	密	やや軟質	橙	5YR7/8	橙	2.5YR7/8	
55	SX16		土師器	甕	口縁部	10%以下	(18.2)			(4.8)	密	硬質	橙	5YR7/8	橙	5YR7/6	胎土：直径4mm大の砂粒を含む
56	SX16		土師器	器台	口縁部	10%以下	(16.2)			(2.2)	緻密	硬質	橙	5YR7/6	橙	5YR6/6	
57	SX16		土師器	鉢	体部～底部	10%			(3.6)	(4.8)	密	硬質	灰白	10YR8/2	灰白	2.5Y8/1	

※(数値)は残存値

第４章　第29次調査の成果

第１節　基本土層（図24、写真4）

福満遺跡第27～30次調査の基本層位は、Ⅰ～Ⅴ層に分類できる。Ⅰ層は褐灰色礫、Ⅱ層は灰黄褐色礫混じり粘質土で、Ⅲ層は暗緑灰色粘質土で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層はいずれも近現代造成土である。Ⅳ層はオリーブ灰色粘質土、Ⅴ層は黄褐色粘質土で基盤層である。Ⅴ層上面が遺構検出面となる。調査地一帯は、過去にパルプ関連の工場用地であったため、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は、その工場用地とその後の土地利用の際のものと考えられる。

写真４　第29次調査区南東壁土層断面〔西から〕

第27次調査の基本土層で既述したとおり、第27～30次の一連の調査区の地形は南東から北西に向かってわずかに下がっていることより、調査区南東側では、Ⅳ層がⅢ層造成時に削平を受けているため残存しておらず、地形が下がる北西側に向かうにつれて徐々に堆積が確認される状況である。

第27～30次調査の基本層位は上記のとおりであるが、第29次調査区は過去に宅地として利用されてきたため、Ⅰ～Ⅲ層の影響を受けておらず、その代わり宅地造成時の造成土（1・8・9層）が確認されている。その造成土の直下にⅣ層・Ⅴ層が確認され、Ⅴ層上面で遺構を検出した。検出した遺構面（基盤層）の標高は、約93.9ｍを測る。

第２節　検出遺構と遺物

(1) 概要（図23）

第29次調査では、調査区南西端で遺構・遺物が検出された。掘立柱建物と溝などである。ここでは各遺構の概要を述べる。

(2) 掘立柱建物（SB1）

SB1（図25）

調査区の南西端で検出された掘立柱建物である。調査区端にかかるため建物プラン全体を確認できたわけではないが、梁行1間以上×桁行2間（約4.14m）以上の規模を持ち、建物の主軸方向はN－29°－Wの方位をとる。柱間は梁行は不明で、桁行は約1.94～2.20ｍを測る。

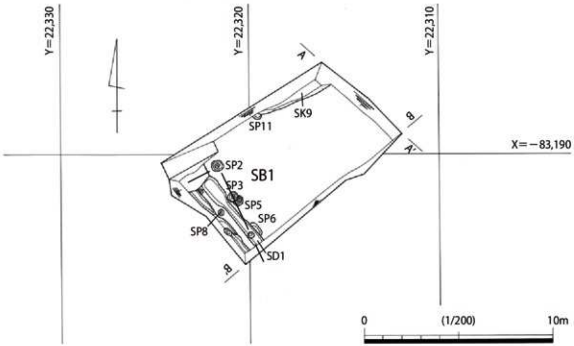
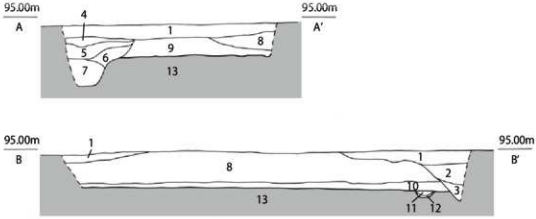


図23　第29次調査区遺構全図



A-A'、B-B'土層断面

1. にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土（近現代造成土）
2. にぶい礫混じり粘質土（近現代攪乱）
3. 暗オリーブ礫混じり粘土（近現代攪乱）
4. にぶい黄褐色砂礫（近現代攪乱）
5. 褐色礫混じり粘質土（近現代攪乱）
6. 褐灰色砂礫混じり粘質土（近現代攪乱）
7. 黒褐色砂礫（近現代攪乱）
8. 灰黄褐色粗砂混じり礫（近現代造成土）
9. 灰黄褐色粘質土（近現代造成土）
10. 暗緑灰色粘質土（近現代造成土）
11. 黄灰色粘質土（SD1）
12. にぶい黄褐色粘質土（SD1）
13. 黄褐色粘質土【Ⅴ層】（基盤層）

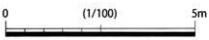


図24　第29次調査区南東壁土層断面図

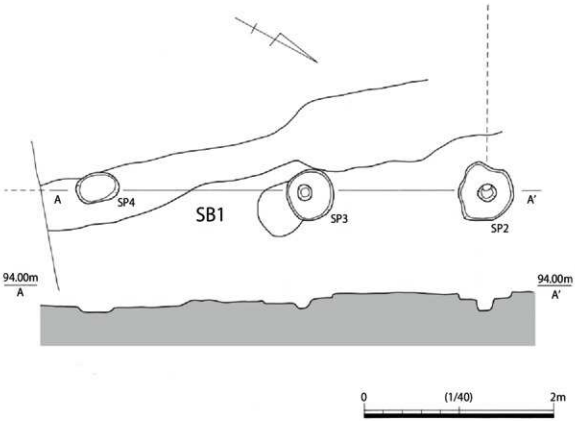


図25　第29次調査区掘立柱建物（SB1）平面図・断面図

柱穴は、SP2～SP4で構成され、掘り方の平面形は楕円形と円形で、直径は約0.45～0.63m、深さは約0.06～0.21mを測る。

遺物は、出土していない。

(3) 溝（SD1）

SD1（図23）

調査区の南西端で検出された溝である。検出できている長さは約4.40m、幅約0.81m、深さ約0.20mを測り、溝の断面はU字状を呈す。埋土は、1層：黄灰色粘質土、2層：にぶい黄褐色粘質土の2層である。SP4に切られる。

遺物は、出土していない。

(4) 小結

第29次調査区では、掘立柱建物や溝を確認したが、遺構は調査区南西端に限られており、北東側では確認されなかった。第27～30次調査区全域で遺構のひろがりが確認されたが、第29次調査区は一連の遺構の広がりの北東端部の可能性がある。

第5章　総　括

第1節　第27・28・29次調査の成果と課題

今回の調査は福満遺跡第27・28・29次調査であった。ここでは、改めて今回の調査成果を振り返りまとめとしたい。

今回の発掘調査では、第27・28・29次調査区全域で竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑、小穴、落ち込み状遺構などを確認した。それぞれの調査区の主な成果だが、第27次調査区では、古墳時代後期の古墳の周濠（周溝）と推測される平面弧状の落ち込み状遺構（SX1）を確認し

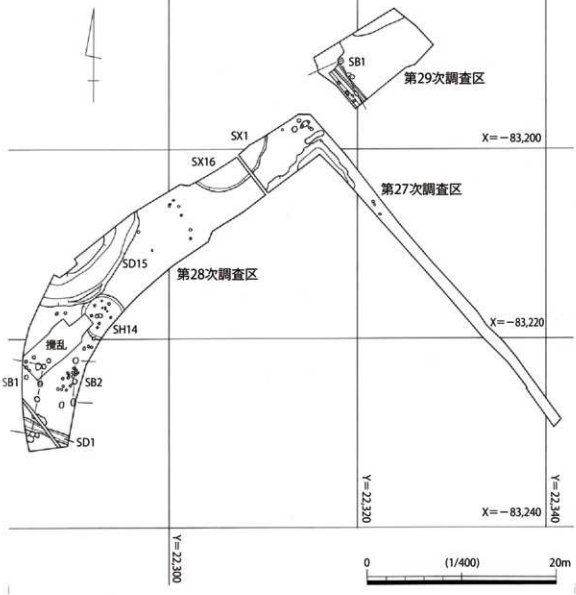


図26　第27・28・29次調査区遺構全図

た。第28次調査区では、弥生時代後期～終末期の平面多角形（五角形ないし六角形）の竪穴建物（SH14）、古墳時代後期の古墳の周濠（周溝）と推測される平面弧状の溝（SD15）や落ち込み状遺構（SX16）、時期は判然としないが主軸がほぼ正南北方向を向く掘立柱建物（SB1・SB2）を確認した。第29次調査区では、時期は判然としないが主軸がやや西傾（N－29°―W）する掘立柱建物（SB1）を確認した。

第28次SH14の弥生時代後期～終末期と考えられる平面多角形の竪穴建物だが、同様の遺構は、近江地域では野洲川流域を中心とする南部地域に集中する傾向がある。彦根市域では、南部の稲部遺跡や稲部西遺跡で確認されているが、福満遺跡が位置する市域中央の犬上川流域では今回が初めての確認となる。調査地周辺の当該期の遺構だが、近隣では竪穴建物は確認されておらず、少し離れた第23次調査で平面方形の竪穴建物2棟が、第5・8・18次調査で弥生時代後期～古墳時代初頭とみられる方形周溝墓が散見される状況である。現段階では、第28次SH14の多角形建物の集落内での位置や性格、また、当該期の集落域や墓域、生産域の広がりなどは判然としておらず、今後の調査の課題と言える。

第27次SX1や第28次SD15・SX16などは古墳時代後期の古墳の周濠（周溝）と推測した。今回の調査地の北西約70mで実施された第18次調査でも当該期の古墳が確認されており、今回の調査地から北西に墓域が広がっていた可能性がある。集落域だが、第23次調査で竪穴建物を中心とする集落関連遺構が確認されており、当該期の集落域の中心を形成していた可能性がある。生産域については不明である。福満遺跡の古墳時代後期の遺構の広がりに関しては、以上のような傾向をみることができる、今後、更なる調査成果の積み重ねにより、より詳細な状況の整理と分析が課題となっていく。

最後に、主軸をほぼ正南北方向にとる掘立柱建物（第28次SB1・SB2）と、主軸がやや西傾する掘立柱建物（第29次SB1）については、今回の調査では時期を判別できる遺物の出土がなかったため、遺構の時期は不明とした。ただ、隣接する第30次調査区で、同様の主軸を持つ掘立柱建物が確認されているため、そちらの成果を参考としたい。すなわち、第30次調査で確認された主軸をほぼ正南北方向にとる掘立柱建物は7～8世紀、主軸がやや西傾する掘立柱建物は12世紀と推測した。現段階では、隣接調査地での同軸建物であるため、今回の調査で確認された掘立柱建物についても同様の時期で理解をしておきたい。

以上が福満遺跡第27・28・29次調査における調査成果と課題である。今回の調査は、調査範囲が限られていたにもかかわらず、遺構の時期も性格も多種・多様な成果を得ることができた。ただ、前述したとおり、新たな課題が見えてきたのも確かである。今後も、これらの課題を意識した調査を継続し、更なる資料の充実を図りたい。

参考文献

伴野幸一　2003「伊勢遺跡の構成と五角形住居 ―結びにかえて―」『伊勢遺跡75次発掘調査報告書』守山市教育委員会

第27次：調査区調査前風景〔南東から〕

第27次：調査区北西地区全景〔南西から〕

第27次：調査区全景〔北西から〕

第27次：調査区全景〔南東から〕

第27次：落ち込み状遺構（SX1）完掘状況〔北東から〕

第27次：落ち込み状遺構（SX1）土層断面〔北東から〕

第27次：小穴（SP3）内集石状況〔南東から〕

第28次：調査区調査前風景〔南から〕

第28次：
調査区全景〔北東から〕

第28次：
竪穴建物（SH14）
上層完掘状況〔北西から〕

第28次：
竪穴建物（SH14）
完掘状況〔北西から〕

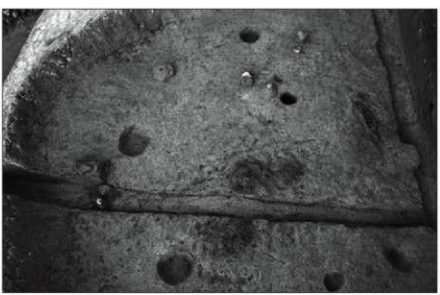
第28次:
竪穴建物(SH14)
完掘状況〔北から〕

第28次:
竪穴建物(SH14)
完掘状況〔真上から〕

第28次:
竪穴建物(SH14)
遺物出土状況〔北から〕

図版四

第28次：
竪穴建物（SH14）
遺物出土状況〔南東から〕



第28次：
竪穴建物（SH14）
床面状況〔南西から〕

第28次：
竪穴建物（SH14）
焼土層・炭化層検出状況
〔北東から〕

第28次：金属製品（41）出土状況〔北西から〕

第28次：調査区全景〔南から〕

第28次：溝（SD1）完掘状況〔南東から〕

第28次：溝（SD1）完掘状況〔北東から〕

第28次：溝（SD1）土層断面〔南東から〕

第28次：掘立柱建物（右：SB1、左：SB2）完掘状況〔北から〕

第28次：溝（SD15）土層A-A'断面〔南西から〕

第28次：溝（SD15）土層B-B'断面〔北東から〕

図版六

第28次：
溝（SD15）
完掘状況〔南東から〕

第28次：
溝（SD15）
完掘状況〔南から〕

第28次：
溝（SD15）、
落ち込み状遺構（SX16）
完掘状況〔北東から〕

第28次：溝（SD15）完掘状況〔北東から〕

第28次：落ち込み状遺構（SX16）完掘状況〔南西から〕

第28次：落ち込み状遺構（SX16）完掘状況〔北東から〕

第28次：落ち込み状遺構（SX16）土層断面〔南東から〕

第29次：調査区調査前風景〔南西から〕

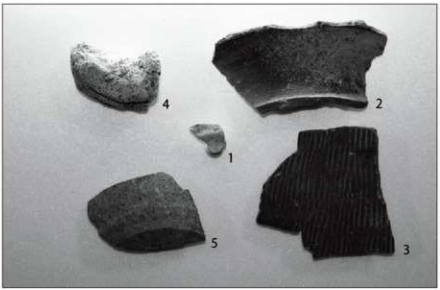
第29次：遺構全図〔南西から〕

第29次：遺構全図〔北東から〕

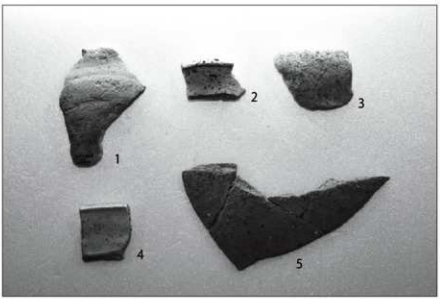
第29次：溝（SD1）完掘状況〔北西から〕

図版八

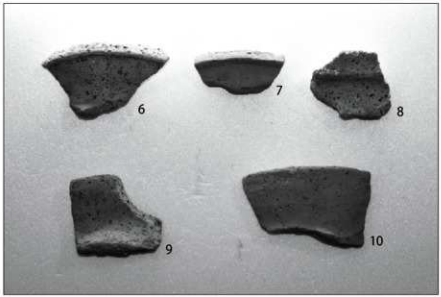
第29次：
掘立柱建物（SB1）
完掘状況（北西から）



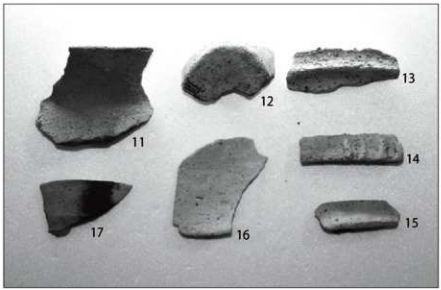
第27次：
SX1出土遺物



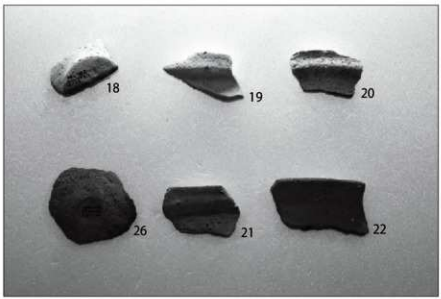
第28次：
各遺構出土遺物
1（SK26）、2（SP28）、
3（SP2）、4（SP12）、
5（SP22）



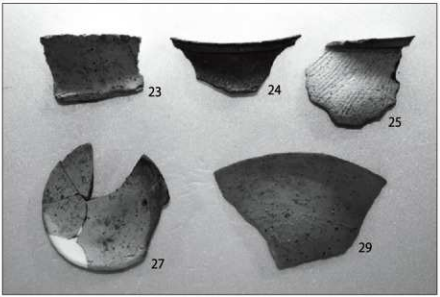
第28次：
SH14出土遺物



第28次：
SH14出土遺物

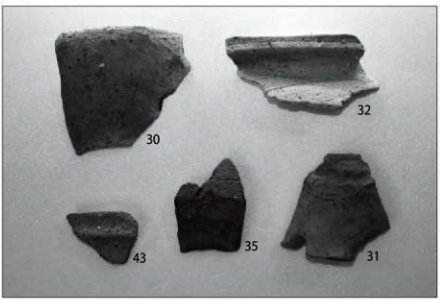


第28次：
SH14出土遺物

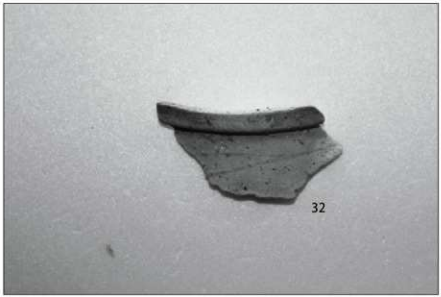


第28次：
SH14出土遺物

第28次：
SH14出土遺物



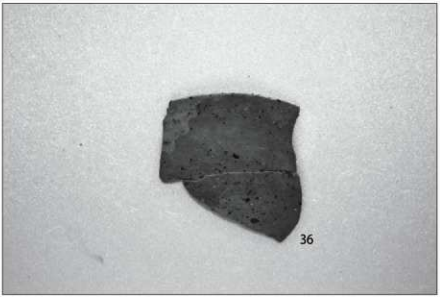
第28次：
SH14、SD15出土遺物
30～32・35（SH14）、
43（SD15）



第28次：
SH14出土遺物

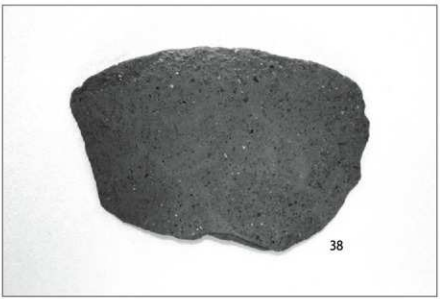
第28次：
SH14出土遺物

第28次：
SH14出土遺物

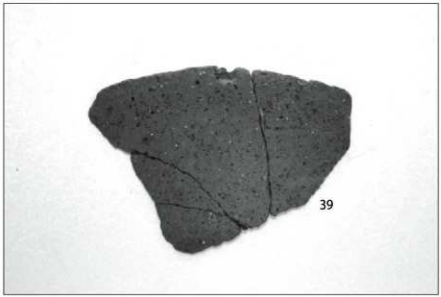


第28次：
SH14出土遺物

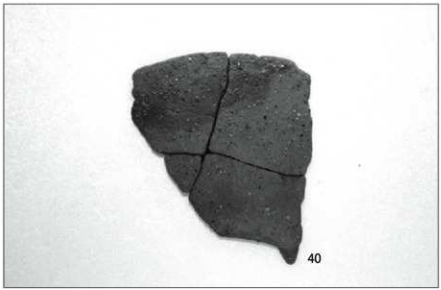
第28次：
SH14出土遺物



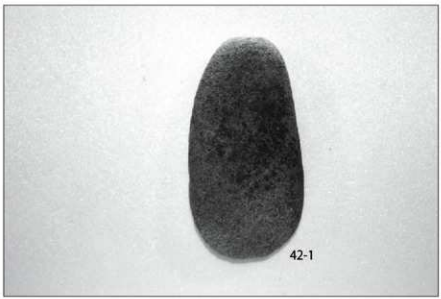
第28次：
SH14出土遺物



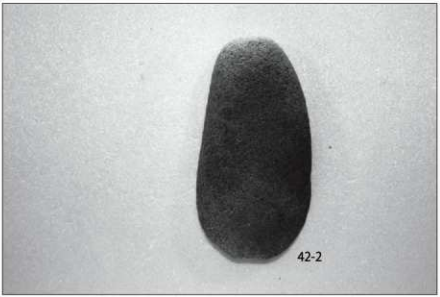
第28次：
SH14出土遺物



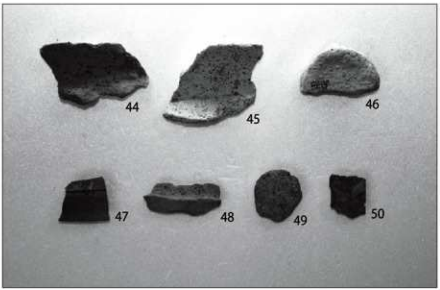
第28次：
SH14出土遺物



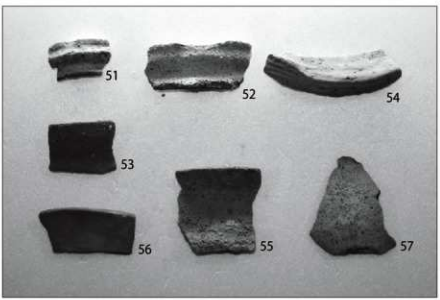
第28次：
SH14出土遺物



第28次：
SH14出土遺物



第28次：
SD15出土遺物



第28次：
SD15、SX16出土遺物
51～54（SD15）、
55～57（SX16）

報告書抄録

ふりがな	ふくみついせきだい27・28・29じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	福満遺跡第27・28・29次発掘調査報告書
副書名	市道小泉城南小学校線道路改良工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	93
編著者名	林　昭男
編集機関	彦根市 観光文化戦略部 文化財課
所在地	〒522-8501 彦根市元町4番2号　℡0749-26-5833
発行年月日	20240331

所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
福満遺跡	彦根市小泉町地先	252026	202-015	35度14分51秒	136度15分35秒	103㎡	20190415～20190625	市道小泉城南小学校線道路改良工事
						308㎡	20190703～20191031	
						115㎡	20200408～20200630	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福満遺跡(27次)	集落	古墳時代	落ち込み状遺構、溝、土坑、小穴	土師器、須恵器	第28次調査区で、犬上川流域では初めてとなる、弥生時代後期～終末期の平面多角形の竪穴建物を確認。
福満遺跡(28次)	集落	弥生時代後期～終末期 飛鳥時代～奈良時代	竪穴建物、掘立柱建物、落ち込み状遺構、溝（周溝）土坑、小穴	弥生土器、土師器、須恵器、金属製品、石製品	
福満遺跡(29次)	集落	平安時代	掘立柱建物、溝、土坑、小穴	土師器	

要約	犬上川右岸の自然堤防あるいは氾濫平野に位置する福満遺跡における第27・28・29次調査である。第27次調査では、古墳時代後期の古墳の周濠と推測される落ち込み状遺構を確認した。第28次調査では、弥生時代後期～終末期の平面多角形の竪穴建物、古墳時代後期の古墳の周濠と推測される溝や落ち込み状遺構、時期は判然としないが主軸がやや東傾する掘立柱建物を確認した。第29次調査では、時期は判然としないが主軸がやや西傾する掘立柱建物を確認した。各調査区で具体的な開発の変遷・状況を確認できたことは、当該地周辺における古代の地域社会像を考える上でも重要な成果と言える。

彦根市埋蔵文化財調査報告書第93集

福満遺跡第27・28・29次発掘調査報告書

令和6年(2024年) 3月31日発行

編集・発行：彦根市観光文化戦略部文化財課
彦根市元町4番2号
TEL 0749-26-5833
印刷・製本：有限会社 田中印刷所

FUKUMITSU SITE

2024